

ドン・ゴキブリアン物語

— 復樂園 —

The story of DonGokiburian
- Paradise Regained -

村西キヨシ

目次

1. 『金閣寺』……………	5
2. 下一ヶタの男……………	17
3. 『金隠し』……………	20
4. 『失楽園』事件……………	25
5. 捨て子事件……………	42
6. 『エデンの南』……………	44
7. 『復楽園ノート』……………	50
(1) 鼻からウンコが出た話し……………	50
(2) 金隠し……………	53
(3) インポ・テンスの発覚と破婚……………	55
(4) *イス感染辞さず、腹上死も辞さず……………	58

(5)	『失樂園』事件	66
(6)	インポ・テンスの原因が遂に解明される。	68
(7)	アーヤとの出会い	72
(8)	アーヤとの別れ―ことの顛末(てんまつ)―	83
8.	阿部の再婚と昌子との養子縁組	87
9.	『心中並びに殺人未遂(?)』事件	90
10.	阿部夫妻の葬式	93
11.	『復樂園ノート』の結末	96

1. 『金閣寺』

平成* * 年四月八日、私達は光栄にも伊勢・志摩医科大学に入学を許された。入学式では本学の創立者でもあられる学長先生からの訓示があった。「入学おめでとう。言うまでもなく学生諸君にとってはより偏差値の高い大学に合格することが名誉である。諸君もそのために日夜勉学に勤しみ、今日の栄冠を獲得したのである。しかし教育者にとっては優秀な学生を一人前の社会人に、君達の場合は医師だが、育て上げることのみが名誉なことではない。むしろ必ずしも優秀でない学生を立派に育て上げることこそが名誉なのである。周知の通りアメリカの大学は―我が国とは逆に―入学は易しいが卒業は難しい。私はそこに必ずしも優秀でない学生を、何とか一人前の社会人に育て上げようとするアメリカの教育者の情熱を感じた。その後私は五年間教育者として留学して彼らの情熱を肌で感じた。本学はアメリカ式教育を標榜する。私は敢て言うが諸君の中で何人かは、本来は医師に成れない筈の者が国家試験に合格するだろう。その代わりに諸君も入学できたのだから卒業もできるだろう等と言う甘い考えを捨てることだ。教育とは真剣勝負なのだ」訓示が終わると身が引き締まる思いがした。しかしその後私たちの緊張を解き解すかのように女子の先輩方がコーラスで美しく校歌を斉唱されるのを聞いて、私たちの心はやや和んだ。一息つくとスクリーンが降りて今度は映画で、本学の決して古くはないが、輝かしい歴史が紹介された。私は誇りと責任を強く感じた。入学式が終わると少し気が早いかも知れないが、自分が生まれ変わったようにさえ感じられた。

それから数週間は慣れない学内を右往左往している内に慌しく過ぎ去り、何をしていたのか殆ど記憶が残っていない程である。しかし私達がようやく日常生活を取り戻した頃、改めて本学に入学できた喜びを噛み締めることになった。学長先生の友人でもあられるW博士が私達の入学を祝い、遥々本学に来られたのである。初めて間近に見る博士は白髪的美丽い穏やかな初老の紳士であった。手振りを交えてユーモアたっぷりインタン時代の体験を話され、講堂はしばし笑いの渦に包まれた。博士は言うまでもなく名作「失楽園」を初め数々の傑作を書かれた日本を代表する

作家であられる。しかし博士は小説家として余りにも高名であられるために世間では忘れ去られているが、国際的にも名の通った医学者でもあられる。インボ・テンスの治療にも深い関心をお持ちである。

W博士が来られてから私達の間で医学と文学の関係を考えようと言う動きが起きた。そして特に文学に関心の深い者が集まってささやかながらサークルを立ち上げた。サークルと云っても授業が終わった後、近くの喫茶店に集まってガヤガヤやる程度のことであつたが。その中心になつたのが阿部であつた。授業中はいつも眠たそうにしている男が、文学の話になると人が変わったように目を輝かせて弁舌を振るつたのである。阿部は何とW博士の全作品を読み切つていた。又博士以外の作家についても造詣が深く、三島由紀夫も全作品を読み切つていた。そして彼は私達の無知をからかうかのように饒舌に喋つた。何故この男が文学部ではなくに医学部にいるのか誰もが不思議に思つた。さて私達が入学して最初の夏休みを迎える直前に近畿地方又は中部地方の有名大学の医学部か有名医大の中から一つを選び、見学に行くことを命じられた。それは分散見学と云い、本学特有の制度であつた。リストにはK大、H大、M大の医学部を初めN医大、K医大等錚々たる名門が並んでいた。私達のサークルでも話題になり、親睦を深めるために日帰りの旅行ではあつたが、同じ大学に行くことを決めた。

しかしどこに行くのかは中々意見が纏まらなかつた。阿部はK大医学部に行くことを強硬に主張した。K大に行つた帰りに金閣寺に寄ろうといつた。そこで三島由紀夫の名作の解説でもする積もりであることは直ぐ分かつた。一番で合格したと言う藤田は嫌がった。

「あそこは日本一、二の名門だから止めて置こう。電車代も掛かるし」「N大なら近いよ」石川が茶化すように云つた。しかし藤田は首を縦に振らなかつた。紅一点の吉岡さんが藤田をたしなめる様に云つた。「馬鹿ね、藤田君たらつ。名門だから見る価値があるのよ。同じ様な所に行つても仕方ないじゃない」「こんな所と同じような所が他にもあるのかな」「こいつ、もう一回云つてみる」石川が血相を変えて藤田の胸倉を掴んだ。二人は同じ高校の出身であつた。「止めろよ。仲間喧嘩してどうする気か」私が止めに入った。阿部がポツリと呟いた。「僕が悪かつた。京都に行くの

1. 『金閣寺』

はよそう」「いや、K大に行こう」石川が未だ腹を立てながら毒づいた。「そしたらお前もここで良かったと分かるよ。高校の時のように秀才面できるからな」藤田も無然とした表情で言った。「そうしよう」

数日後私達のサークルは他のグループと混じり、全部で二十人ほどがマイクロ・バスに乗り込み京都に向かった。学長の紹介状は藤田が預かっていた。伊勢地方に特有の澄み切った青空には既に太陽がギリギリ輝いていた。バスに乗り込むとクーラーの風が心地よくあたった。小型バスはゆっくりと滑る様に走り出した。しばらくして窓から青い海が見えると一斉に完成が湧き起こった。海には白い船が何十艘も航跡を描き、青空を自在に飛び交うカモメと技を競っているかのように見えた。私は空の青さと海の青さの違いを見極めようと水平線を捜した。しかし海の果ては波の飛沫がカーテンのように曖昧にしていた。

途端に有名な夫婦岩が私の目に飛び込んで来た。お社を守る鬱蒼とした森は一向に見えなかったが、私達は正しく神宮の神域にいることを思った。しばらくするとヨットが何艘も並んで繋がれているのが見えた。「まあ、美しい！」吉岡さんが嘆声を上げた。阿部が指をさして云った。「あれが阿部家のヨットだ」私達は目で捜したが、勿論ヨットの良い所にチツポケながらも教会が建っていることに奇異な感じを持った。

それから間もなくバスはパーキング・エリアに入った。そこでようやく私達は昼食を味わうことができた。私は藤田が席を外した際に石川に尋ねた。「もしかして藤田はK大の医学部を受けたのか?」「まさか」石川は笑いながら愛知県のある医大の名を上げた。私達が納得すると彼は一言付け加えた。「絶対大丈夫と折り紙付きだったが落ちたのさ」間もなく藤田が帰って来た。私達は素知らぬ振りで食事を続けた。再びバスに乗って二時間ほどしてK大医学部に着いた。

私達は事務員に導かれて先ず遺伝子工学研究所を見学した。某教授が私達を出迎えて下さった。一同整列したところで藤田が一步前に出てどこで習ったのか、紋切り方の挨拶をして学長の紹介状を手渡した。某教授はニコヤカに微

笑みながら案内をしてくれた。

学内は外観では分からなかったが、中に入れば果てしなく広かった。そこだけで母校の二、三倍はあったろうか。私達は先ずそのスケールに驚かされた。そして広大な構内に研究室がズラリと並び、創立者の肖像と赫々たる業績の説明が飾られていた。私は何時かテレビで見た野球殿堂を思い出していた。私達は某教授の案内で偉大な業績を次々に紹介して頂いた。

どれ一つを取っても驚きに値する物ばかりであったが、特にK大で世界に先駆けて創製された*P s細胞を電子顕微鏡で見た時は、竜宮城で玉手箱を貰ったような気持ちになった。私達はロビーでしばし休んだ。そして事務員に学部を案内されて愈々授業の見学になった。講師が私達を紹介すると何人かの学生が振り向いて、哀れむような眼差しで私達を見た。講師はこれ見よがしに難しい専門用語を使い授業を始めた。レベルが高すぎて私にはチンプンカンであった。藤田もじつと聞き入っていたが、まるで分らない様子であった。

私達は青ざめて顔を見合わせた。夢見心地でK大を出ると、熱気に包まれた状態になった。相当時間が経っている筈なのに、未だ太陽がギラギラと輝いていて、伊勢の空を思いだした。そこで私達はようやく、あの広大な構内全体にクーラーがかかっているのに気付いた。「やっぱりK大になんかに来るのじゃなかった。折角医大に合格したのに有り難味が消えうせたよ」石川がションボリ呟いた。「だから云っただろう」藤田も同調した。私達はトボトボ歩きながらバス停を捜していた。阿部が手を上げてタクシーを二台止めた。「皆乗ってくれ。僕の奢りだ」皆が歓声を上げてタクシーに乗り込んだ。阿部の気配りであった。小一時間ほど建って金閣寺に着いた。次第に胸が高まるのを感じながらも、黙々と砂砂利を踏みしめて私達は歩いた。テレビで、映画で、教科書で一体何回金閣を見てきたことだろうか。しかしもうすぐ本物の金閣を見られるのだ！ 自然と足の動きが早まった。そして遥かに金色の光を認めた時に私達は思わず駆け出した。

私達の前に本物の金閣の前に立っていた。「まあ、綺麗」吉岡さんが思わず嘆声を上げた。阿部は満足気に微笑んだ。

1. 『金閣寺』

庭では私達の感嘆を他所に僧侶が黙々と掃き清めていた。阿部がつかつかと歩み寄って何事か話し掛けた。僧侶は首を横に振っていた。阿部は白い袋を取り出して袖に入れた。僧侶はニッコリ笑って頷いた。阿部は振り向いて私達を呼んだ。私達は僧侶に導かれて金閣の中に入った。法水院とか云う大層な名称で呼ばれている一階はガランとして涼しげであった。突然阿部が大声を出した。「これだ、これが見たかった」私達が驚いてそこへ行くと硝子のケースに納められた巧緻な金閣の模型があった。

阿部は目を輝かしながら先生が生徒を諭すような口調で私達に尋ねた。「君達は「金閣寺」を読んだことはあるかい？」私と藤田と石川が手を上げた。吉岡さんだけが読んでいなかった。阿部は頷くと「金閣寺」の一節を暗誦した。「この模型は私の気に入った。このほうがむしろ、私の夢見ていた金閣に近かった。そして大きな金閣の内部にこんなにそっくりそのままの小さな金閣が納まっているさまは、大宇宙の中に小宇宙が存在するような、無限の照応を思わせられた。初めて私は夢みることができた。この模型よりもさらにさらに小さい、しかも完全な金閣と、本物の金閣よりも無限に大きい、ほとんど世界を包むような金閣とを」

そして得意げに又私達に尋ねた。「何故三島先生がこの一文を書かれたか分かるかい？」私達は無言で首を振った。そこで阿部は驚くべき発言をした。「金閣寺」は実は自殺の小説だったのだ。「物の怪・金閣」の「藤田が唇を尖がらせて反論した。「おいおい、そんな話は聞いたことがないぞ」阿部は涼しい顔で今度はウパニシャドの一節を暗唱した。「原子よりもさらに微小さく、大きいものよりもさらに大きいアートマンは、この世の被造物の胸奥に置かれている」「(アートマンは)米粒よりも麦粒よりも、芥子粒よりも、黍粒よりも、あるいは黍粒の核よりも微さい。(アートマンは)大地よりも大きく、虚空よりも大きく、天よりも大きくこれら諸世界よりも大きい」

「さっきの文章とそっくりじゃない」吉岡さんが驚いた様子であった。「このアートマンとはヒンズー教では人間の魂であり、輪廻転生する主体なのだ。」

阿部は得意気に話を続けた。「金閣寺」の一節は金閣にもアートマン、即ち輪廻の主体が生まれていることを示唆

するのだ」阿部は又「金閣寺」の一節を暗唱した。「たとえば、ただ家事の便に指物師が作った小抽斗も、時を経るにつれ時間がその物の形態を凌駕して、数十年数百年後には、逆に時間が凝固してその形態をとったかのようなのである。一定の小さな空間が、はじめは物体によって占められていたのが、凝結した時間によって占められたようになる。それはある種の霊への化身だ。中世のお伽草子の一つ「付喪神記」の冒頭にはこう書いてある。「陰陽雜記云、器物百年を経て、化して精霊を得てより、人の心を誑かす、これを付喪神と号すといへり。是によりて世俗、毎年立春にさきたちて、人家のふる具足を、払いいたして、路次にすつる事侍り、これを煤払いといふ。これ則、百年に一年たらぬ付喪神の災難にあはしとなり」私の行為はかくて付喪神のわざわざいに人々の目をひらき、このわざわざいから彼らを救うことになろう」「その付喪神が『物の怪・金閣』の正体ね」吉岡さんが目を輝かした。「その通り。ここでは「物の怪・金閣」が人間のアートマンとは違い、後天的に生まれたとされているのだ。しかし是だけ話者に語らせながら、その付喪神が輪廻の主体であることを話者には悟らせていない」「それはそうだろう。付喪神が輪廻の主体なら殺しても意味がなくなる」藤田が珍しく同意した。「それだけではない。実はこの一文の末尾には天才のみに可能なアイロニーが込められているのだ。話者は付喪神の災いから人々を守るために金閣を燃やそうとする。しかし実は彼がどのように考えたことが付喪神の災いだったのだ。実際にも話者のモデルになった溝口と言う坊主は身を滅ぼした。つまりあの小説の主人公は話者ではなく物の怪であったのだ。物の怪は自殺するために人間に取り付き、自らの目的を達成するだけでなく、利用した人間を滅ぼしもしたのだ。賢明にも作者の三島先生は話者にそのことを少しも気付かしておられないが」藤田は納得しなかった。

「しかし何故物の怪は自殺したのか?」「輪廻転生して美しく生まれ変わるために」「あり得ない。金閣は人間とは違い何百年も建ち続けるのだ」「しかし太陽のように何十億年も輝き続ける訳ではないし、五百五十年も経てば建物も古びてくるからな」私は二人の会話を聞いて神宮を思い出した。「成程神宮の御社殿は二十年毎に新しく作り直されることによって、返って永遠の生命を保っていると信じられている。金閣では『物の怪・金閣』自身が作り直しを